

「揃える教育」から「違える教育」へ

―学校の現場から考える「楽しい学校」づくり―

中野 重人

有村 久春

馬居 政幸

国立教育研究所教科教育研究部長

東京都三鷹市立第一小学校長

静岡大学教授

1 ●日本の学校は我慢して頑張るところ

有村 まず「楽しい学校」についての概論からお話しいただけないでしょうか。

中野 小さい頃から学校は変わっていません。楽しいところだという印象をもっている人はあまりいないのではないのでしょうか。「学校はじつと我慢をして頑張るところ」という学校観が、日本の学校をずっと支配してきたと思います。その最初の原因は、明治以降の日本の学校が、国家から「欧米諸国に追いつけ、追い越せ」という

任務を背負わされたところにあります。

有村 子どもに我慢を強いる窮屈な教育は戦後五十年で破綻をきたしていて、メスを入れなくてはならないという先生のお考えに多くの人が共感すると思います。そこを子どもの視点から見ると、どうなりますか。

中野 それは、「我慢すれば、立派になれて良い暮らしができる」という課題が目前にあった貧しい時代の子育てや学校には通用するものでした。しかし、物質的にかつて経験したことのないほど豊かな社会の中で、昔ながらの我慢と頑張りの学校を続けていることが、学校嫌いの

第1章では、研究会メンバーがこれまでの研究会での検討を踏まえ、様々な角度から「楽しい学校」の論述を行った。しかしながら、これらは一つのプレゼンテーションであり、「楽しい学校」のコンセプトをめぐるさらなる論考の広がり 進化が必要と考えた。

こうした観点から、研究会メンバーが、教育に関する学識経験者の方々に、それぞれの角度から「楽しい学校」についてインタビューを行ったものが、第2章である。

第1章の論述ではふれることのできなかつた具体的な事柄や、研究会での検討とは異なる視点からの「楽しい学校」像が示されるなど、大変示唆に富んだ内容となっている。

子どもをつくりだしているとすれば、これは大きな問題で、どうしても学校を変えなければなりません。

2 ● 学校を変えるには授業から

有村 私も一二年ぶりに学校へ戻って、特に授業が変わっていないと感じました。楽しい学校にするには、授業にどんなメスを入れたらよいかお教えください。

中野 学校を変えることは、授業を変えることとイコールで、休み時間や放課後の指導を変えても学校を変えたことにはなりません。その授業が明治以降、本質的に変わっていません。外から与えて子どもたちがクリアしていくものだという授業観ですから、先生が教えて子どもが覚えるというスタイルです。それは一人の先生が多く



中野 重人氏

生活科が提起した第二の問題は、子どもが活動や内容を自分で選択できるようにしたことです。生き物を育てる際には自分で対象を選び、自分の得意なところを伸ばしていくのです。こういう学び方は伝統的な学び方の中にはなく、それを小学校低学年でやろうとしたところに特に大きな意味があります。

自分の関心のあるものに向かっていけるのですから、当然意欲が出て授業中にあくびをしたりしている子どもはいません。先生がいないと子どもは遊んでしまうといわれますが、生活科の授業では自分で選んだ課題があるので、先生がいようがいまいが関係なく一生懸命やっています。

生活科のもう一つの特徴は、子どものいいところを見つけ、ほめて伸ばす教え方をすることです。「こんなことをしては駄目ですよ」という伝統的な教え方は、悪いところを指摘してよくするという教え方ですが、生活科では、「こんなことができたのね」という育て方をします。前者を減点評価とすれば、後者は加点評価です。

そういうと、「子どもを甘やかすな」といわれそうですが、いいところを見つけて伸ばすことと甘やかすことと

の子どもに向かって同じことを、「みんなわかりましたか」という教え方をする「一斉指導」です。

3 ● 生活科の提起したもの

有村 生活科が非常に注目を浴び、学校を変える大きな起爆剤になっています。生活科の発想が従来と違うところを教えていただけませんか。

中野 伝統的な一斉指導は、子どもにとって楽しい授業にならないことが多い。それを楽しい授業にしていくとき、平成元年改訂の学習指導要領でできた生活科は、多少先がけになったのではないのでしょうか。

生活科が新しい授業づくりに向けて問題提起したことの一つは、「体験」を通して学ぶことを授業の中に取り入れたことです。なかでも「遊び」をも学習としたことは、日本の学校制度の中で画期的なことではないかと思っています。小学校低学年の子どもは、長い時間じっとしていることができないので、特に体を動かすことで学んでいく授業づくりが求められます。生活科は遊んでばかりいると批判されたりしますが、遊んでばかりいるわけではありません。

は、まったく別のことです。子どもが命をおびやかすようなことをしたり、差別に関わることをいったりしたときには、きちんと指導しなければなりません。なお、よさを見つける指導は生活科が問題提起したもので、これらの学校・授業づくりに大きな変化をもたらすと思います。

4 ● 必要な発想の転換

有村 先生のお話は大変よくわかります。教員たちはわかっていても、なかなかできないというジレンマを感じているようです。それは、一時間の中でこれだけは教えなければいけないということを、自分なりに決めてしまっているからではないかという気がするのです。

体験することで子どもが満足感を味わうことが大切です。ですから、「そういうことがわかったんだね」と認め、励ますことで十分だと思うのですが、先生は「あなたの今日の授業は八〇点だったよ」と決めたくようになります。中野 それはもつともだと思いません。発想の転換がないと、容易にできることはありません。今までの授業観が変えられなければ、先生が「生活科は何をしているの

かわからない。自由勝手にさせてきた子どもたちは、三年になると言うことを聞かないので困る」と感じるようになるのも無理はありません。それは裏を返せば「昔のままの授業のやり方がいい」といつているようなものです。

そうした授業が今一〇万人近い不登校の児童生徒を生んでいることを考えなければいけません。不登校の子どもは昭和四〇年代からずっとふえていて、平成七年度から八年度にかけては一萬三〇〇〇人も多くなっています。その責任の少なくとも半分は学校にあるのですから、授業のあり方を考え直さざるをえません。

それには伝統的な授業を改めることが必要ですが、実際にやってみると「中学入試がある」などといわれる。そういう言葉は授業を変えないことを意味しますが、それでは問題は何も解決しません。意識改革が伴わなければ授業は変えようがないのです。

5 ● 一斉指導を見直して授業を変革する

有村 授業を変えるには、先生自身が見方を変えなくてはだめですが、私自身、正直にいつてどう教員に助言したらいいか混沌としています。授業を変えるヒントを教

えてもらえるとうれいなのですが。

中野 一斉指導がすべて悪いとはいいません。一斉指導で非常に効率的な授業ができる教材も単元もあるでしょう。私は「一斉指導だけでいいのか」といいたいのです。子どもにはそれぞれ能力差もあり、興味や関心も違います。それを先生がきちんと捉えて対応した教え方を工夫することが必要です。

一人一人違った教材を与えるといった極端なことはいけません。ただ、すっかりわかっている子どもにも「黙っていないさい」といい、全然わかっている子どもにも「まだできないのか」という教え方でいいのか考えなければなりません。

文部省はティームティーチングを平成五年度から取り入れています。これも一人の先生では手薄なところを補おうという新しい教え方です。ITを先生方がまともに考えていけば授業は変わっていくと思いますが、これが至難の技で、隣の先生と話をしたくないといわれたりして、うまくいかないことも少なくないのです。

指導案に子ども名前が出てくるのは、「この子どもにこうし

よう」と先生が事前に考えていることを意味します。ところが、普通は子どもの名前は出てこず、「何分に何を教える」という指導案がほとんどです。

一方、生活科の指導案は、子どもの顔をいくつか書き「この子どもはどうするだろう」といったことをその中に位置づけ、一人一人の子どもに目を向けようとしています。これは大変意義深く、新しい問題提起であると思います。

授業をどう変えるかについては種々の方法があります。なによりも子どもの居場所と出番のある授業を求めていかなければなりません。先生の出番がなければいいわけではありませんが、もう少し子どもの出番を多くしていくことが必要です。そのために先生が少ししゃべるのを抑え、子どもが自分で活動したり考えたりする授業を創っていくべきではないでしょうか。

6 ● 「楽しい」という言葉のもつ積極的な意味

有村 社会が変わり子どもが変わったからこそ、「学校は頑張らなければいけない」と述べる人もいますが、「楽しさ」をキーワードに学校を変えることには積極的にどう

いう意味があるのでしょうか。

中野 「学校が楽しい」という言葉に対して、私たちはあまりよいイメージをもっていないようです。学校が楽しいのはおかしいと感じられるのは、「楽しさ」のイメージが問われているわけですが、私は「楽しい」ことは素晴らしいことだと思います。野球もサッカーもゴルフも、みな楽しいからやるのでしょうか。大人たちはそうやって生活をしているのに、子どもが学校で楽しくてはいけないというものの見方が、まず基本的に問われなければなりません。

人間は楽しければ、次のことをやろうという意欲が湧いてくる。子どもたちに意欲をもたせられれば、しめたものです。楽しいと人間はいろいろなことをめざし、意欲が湧くものと考えるべきなのです。

7 ● 入学試験をめざさない教育を

馬居 先生たちには、「楽しいことは本当によいことなのか。勉強はしつかりしなければならぬのではないか」という縛りがあるのではないのでしょうか。先生が、これだけは子どもに教えないならぬというゴールを想

定すると、子どもたちをそこへ追い込むことになってしまいます。

ところが、それをすべて教えても仕方がない。今の学校の置かれている状況下では、教える内容を限定して、やる気や意欲を豊かにしたほうが子どもにとってむしろプラスではないか、授業そのものの目的が変わってきているのではないかと思うのですが。

中野 今の授業は結局、入学試験をめざす授業です。だから、少し遊びを取り入れると、それは駄目だという発想がすぐに出てきます。「入学試験があるからしようがない」という人に、「それなら学校は入学試験専用にしなさい」というと、今度は逆に「いや、学校は人格完成のためにある」といわれてしまいます。しかし、こういう言い方を変えていけないことには、今の授業を変えられとは思えません。

8 ●「楽しい」学校に相應しい先生とは

有村 先生は全国を回っておられますが、その中で出会われた先生で、これからふえていってほしい先生のタイプがありましたら教えていただけませんか。

ればなりません。それがカウンセリングマインドの「聴き上手」です。子どもたちが保健室へ行くのは、養護の先生が勉強を教えず、子どもの話を聴いてくれて心を癒してくれるからです。聴き上手になれば、相手に応じて自分が何を教えればよいかかわかるわけですから、授業を変えることにもつながっていくと思います。

9 ●体験で学ぶ学校へ

有村 先生が教え上手から聴き上手になって、ゆつくり教育する必要があることはよくわかりますが、なかなかゆつたりした気持ちになれない状況があります。子どもたちに「自分の学校だから好きなように楽しく過ごしていいですよ。先生たちもゆつくりしてあげます」といえる環境に乏しく、先生はより忙しくなっています。

中野 これからは学校週五日制もあって、学校生活がますます過密になり、時間がなくなっていくます。その中で、教えるべきことは徹底して教えるという形でやられたいら、子どもたちは与えられたものを食べざるをえないので、非常に重要な問題が生じてきます。

子どもたちが学校で最も多く時間を費やすのは、国語

中野 基本的に大切なことは、子どもにも慕われ信頼されていることで、それが授業づくりの原点です。これまでの先生は、教え上手になるように一生懸命に研修してきました。明治以降、教え上手の研究が学校をつくってきたのです。

それでいて現在、不登校の子どもが多数います。これは教え上手の教育に問題があるということ、「先生は教える人、子どもは学ぶ人」という関係を考え直すべきだと思います。教え上手になる前に、子どもが何を考えているのか受け入れることのできる、「聴き上手の先生」になるべきです。

先生方が一生懸命に努力しているにもかかわらず、いじめがなくならない。なくならないだけでなく、いじめがあるかどうかさえわからないことが多い。

それは、いじめられている子ども、いじめている子ども生にいわないからで、子どもが先生に何でもいえる間柄になっていないからです。子どもは、先生はあれこれ教えてくれるけれど、遥かに遠いところにいると感じているのです。

子どもが先生に何でも話せるような関係をつくらなけ

や算数などの教科が九割以上で、道徳や特別活動は一割にも足りません。ですから、今の学校に問題があるとすれば、ここだと考えざるをえません。そんなふうにはばらばらに分けて受験用の教育をしいのかということですから。一方、生活科は異質で、教科書ではなく体験でやるので特別活動に似ています。

学校には教科書で学ぶ時間と体験で学ぶ時間とがありますが、前者が圧倒的に多い。それを生活科は少し変えようとしており、新たにできる総合学習も、国語や算数などにも融通性をもたせて、体験による学習内容をふやそうとしています。

教科書で「知識を学ぶ学校」から、体験で「知恵を学ぶ学校」に少しでも改めていこうというのが、生活科であり総合学習です。そんなことを含めて、今までは子どもたちに「生きる力」を育ててこなかったのですから、体験や知恵を身につけることをもう少し大切にすべきだと思います。

10 ●「楽しい」学校の将来像

有村 学校の全体像をみて教科に融通性をもたせるとい

う意味では、総合的な学習の時間はかなり注目できる部分だと思えます。そういった意味で、将来の「楽しい学校像」がイメージとして浮かんできた気がします。そこで、もう少し具体的に楽しい学校づくりに大切なことについてお聞かせくださいませんか。

中野 新しい学校づくりといったときには、「揃える教育」だけではなくて「違える教育」を考えなければいけません。今までは「みんな百点を取りなさい」「みんなここに集まりなさい」という教育でした。これでは早く揃った子どもは元気が出ますが、駄目な子どもは元気が出ません。やる気や自信がもてなかったら、不登校になったりいじめられる子どもになるのは当然です。この子どもたちに元気を出させるにはどうすればいいか。これがこれからの学校の最大の課題だと思います。

できない子どもには違った物差しを当てはめて、例えば「君は人に親切にするところがよい。この前も友達のことをみてやって、あれには先生も泣けたよ」と認めてやれば、その子どもはやる気と自信を出します。そうするには、今までの物差しを変えなければいけません。「違うからこそよい」という人間観・教育観を基本的にもた

います。

私の学校でも校長、教頭を入れても二〇人です。それでいて、子どもが多かった時代と同じような校内組織が存続しています。それが学校を忙しくし、子どもも先生自身も縛っています。そういう点をふまえて、少子化時代の「楽しい学校」の組織についてお考えをお聞かせいただけないでしょうか。

中野 おっしゃるとおり、新しい学校をつくっていく際には、組織的なものも当然考えていかなければなりません。その際に大事なものは、学校組織は何よりも、よい授業をするための組織であるべきだということです。ところが、実際にはいろいろな組織がありすぎます。学校経営という点、施設・設備から地域関係、教職員管理などたくさんあります。それらが大切なことはいうまでもありませんが、学校経営の核心は授業づくりであり、校長先生はよい授業をつくるためにこそ全精力を注ぐべきです。

もちろん、学級定員は少なくしていかなければならないと思えます。今までは、四〇人まで学級定員を減らしてきました。このまま学級定員を三十八人、三十五人と減ら

ないとだめです。成績だけに照準をあてて、点数が悪い子どもはだめだという考えではいけないのです。

私が最初に教えた中学生はもう五三歳になります。彼らの中で成績のよかった子どもには、もちろん立派になっている者がいますが、手紙も書けなかったような子どもも建築業で何名かの社員を雇って生き生きと意欲的にやっていたりしています。

そうしたことをみれば、学校だけが人間の一生を左右するわけではないことは一目瞭然です。だから、算数や国語ができるのは一つの才能だから、それで生きればよい。しかし、その才能がちよっと乏しくても別の才能があるはずだと考えて、それを伸ばしていく子育て観・人間観をもつべきなのです。

11 ● 「楽しい」学校をつくる組織

有村 最後に「楽しい学校づくり」といったとき、学校の組織に非常に気になるところがあります。子どもが非常に多い頃は、三〇学級や四〇学級の学校があつて、教員もそれだけいましたが、今は一〇学級前後というところが非常に多くなり、スタッフも極端に少なくなつて

していけばよいはずですが、平成五年から平成一〇年はそれをしないで、ティームティーチングの要員を確保してきました。今は、財政赤字でそれもスムーズにいかない状態です。

なぜこうなるかといいますと、金を出す方はそれが効率的に使われているかどうかをみるからです。「これをするのでこれだけお金がほしい」といえば、「それなら出します」ということになるのですが、すべて一律にということはどうできません。ティームティーチングについては、そういう発想になつていっています。学級定員を減らしてほしいと大勢の先生がいますが、金を出す方からいえば、一律が問題なのです。

有村 組織については、また違った問題があつて難しいですね。本日は、どうもありがとうございました。

なのでしょね。

西阪 学校は面白いとか楽しいという声は、あまり聞かえてきませんが、楽しんでいる子どももいるのに聞こうとしないからでしょうか。

富田 そうでしょね。それを聞いたら、意外に改善の道が見つかるかもしれません。学校はこんなに楽しい所だ、こうするとこんなに面白くなるんだ、子どもにこう接するとこんなプレゼントを返してくれるんだといった話をいっぱい語り合えば、登校拒否の課題もみえてくるのではないですか。今の先生は、勉強を塾の先生にとられ、心のふれあいを養護教諭やスクールカウンセラーにとられて立つ瀬がありません。しかし、「心のケア」「カウンセリング」で子どもと心地よい関係をつくってよしとしてはいけない。子ども社会で傷ついた心は子ども社会の中でしか本当は癒されないので。クラスで傷ついたら心をクラスで癒すことで、実際の社会でどうやって人間関係をつくっていったらいいか先生は示してほしい。誤解をおそれずにいえば、「クラスは面白いよ。僕は面白い人間だろう」といって、保健室や相談室から子どもを「取り戻してほしい」です。

西阪 保健室が子どもの「溜まり場」になるのは、複雑な問題を含んでいますね。

富田 子どもたちは気持ちを聞いてくれる人を求めて漂流していきます。楽しい学校とは、言葉ではなく気持ちがわかろうとしてくれるところです。今、保健室から図書室の時代になりつつあります。保健室に来る子どもがふえて、そこも息苦しくなり、図書室にたどりついている。そこもだめだと、校庭を掃除している用務員さんのところに行つて話をします。ですから、僕は用務員さんや調理員さん向けの講演を頼まれると、学校に来れば子どもにとつてすべての大人が先生なのだから、「私は教師じゃない」っていわずに、カウンセリングの勉強をしてほしいと話すのです。

最後に、「登校拒否その後」の若者たちの相談を通して感じることは、「楽しい学校」の前に「楽しい家庭」が必須だ、ということ。弱音や愚痴が安心していえる「還る家」に、クラスが、先生が、親が、大人が、まずなつてあげたいですね。

西阪 本日は、どうもありがとうございました。